

聖書：ダニエル 10：1～11：1

説教題：恐れるな、安心せよ、強くあれ

日時：2015年2月8日

ダニエル書も残り3章になりました。この3章はひと続きの物語となっています。ここでダニエルは最後の幻を受けます。その内容は11章に記されます。その幻を挟んで10章は導入部分、12章は結論部分となっています。

10章1節に時はペルシャの王クロスの第3年。この年にダニエルに一つの啓示が与えられます。彼はこの時、三週間の喪に服していました。9章にはイスラエルと自分の罪のために断食していたことが記されましたが、同じように何らかの罪の悔い改めをしていたのでしょうか。しかしもっとありそうなことは、この時のイスラエルの状況を思っ取りなしの祈りをささげていたということです。ペルシャの王クロスは捕囚の民に、エルサレムに帰って宮を建てよ！との帰還命令を出します。そして第一陣が総督ゼルバベルと共にエルサレムへ向かいました。しかし彼らは、そこに住んでいた者たちからの妨害活動を受けて神殿建築工事が中止に追い込まれます。そのニュースがダニエルの耳にも届いて、彼は悲しみ、主のあわれみと導きを求めて断食を行っていたと考えられます。その時にこの幻を受けたのです。

ダニエルはティグリス川の岸で一人の人を見ます。その人は亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締め、体は緑柱石のよう、顔はいなずまのようで、目は燃えるたいまつのように、腕と足はみがき上げた青銅のようでした。またその声はまるで群衆の声のようでした。ダニエルと一緒にいた人たちは幻は見ませんでした。とにかく異常な出来事が生じていることを知って震え上がって逃げ隠れます。ダニエル自身も力が抜け、顔の輝きも失せ、意識を失ってうつぶせに倒れます。一体この人は誰でしょう。一読したところ、普通の天使とは違い、神的存在のように思えます。そこである人は受肉前のキリストではないかと言います。しかしある人は、そのようにははっきり言われていないと反論します。そしてエゼキエル書の冒頭に出て来るケルビムと描写が似ていると言います。ここは学者たちの間でも意見が分かれていますので独断的に語ることは控えるべきだと思います。またどちらであっても、今日の章のメッセージには大きな違いはもたらさないと。この特別な存在を前にしてダニエルは倒れました。ここで考えさせられることは、神の啓示を受けるとは大変なことであるということです。私たちはイスに座ってコーヒーを飲みながら聖書を開くかもしれませんが、最初の人にとってはそうでなかった。倒れたり、意識を失ったり、息も残つ

ていない状況になりながら神の言葉を受けた。それほどの神聖なる御言葉に私たちは接しているのです。

倒れ伏したダニエルは触れられ、ひざと手を揺さぶられて起き上がります。そして励ましの言葉を受けます。「神に愛されている人ダニエルよ！」と。そしてなぜダニエルのところに来たのかが説明されます。12 節：「彼は私に言った。『恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたの言葉は聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。』」すなわち彼はダニエルの 3 週間に渡る祈りへの応答としてここに来た。ダニエルの祈りはこのように御前で覚えられていたのです。そして 14 節でこの天的存在は自分が来た目的を述べます。「終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために」。ダニエルはイスラエルの民のこれからの歩みを案じ、とりなしの祈りをささげていました。そんな彼に、今後イスラエルはどのような歩みをたどるのかを知らせるためにやって来た。その具体的な内容が 11 章で述べられることとなります。

さて今日の章で注目すべきは 13 節です。ここで天的存在がダニエルのところに来るのが遅くなった理由について語られています。21 日間は 3 週間で、ダニエルの祈りの期間に相当します。すぐ来ることができなかつたのはなぜか。それはペルシャの国の君が私に向かって立っていたからである。しかし第一の君のひとりミカエルが助けに来たので、そこは彼に任せて、私はあなたのところに来た。果たしてこの目の前の存在とミカエルとを煩わせていたペルシャの国の君とは誰でしょうか。まず言えることは天的存在に向かって立っているのですから、相手も天的存在であるということです。そして神に仕える天的存在に対抗するのですから、相手は悪い天的存在であるということです。ここに示されていることは何でしょう。それは目に見える世界の背後には、このような人間の目には通常見えない霊的な世界での戦いがあるということです。イスラエルを守るためにこの天的存在やミカエルがいたように、ペルシャの国の上にはそれに対抗する悪の霊的存在があった。そして神に敵対する霊的存在の長はサタン以外にありませんから、相手はサタンの下で働いている霊ということになります。この悪霊が対立して立っていたので、ダニエルのところに来た彼はしばらく席をはずせなかつた。しかし天使の世界の第一階級に属するミカエルが助けに来たので、彼に任せて、私はあなたに大切なメッセージを告げるためにここに来たと言っているのです。

初めてここを読んだ方はビックリするかもしれません。聖書はこんなことを語っているのかと。しかしこれは特別奇異なことではなく、聖書の根幹メッセージに関わることです。この悪霊の問題を考える時、私たちは 2 つの極端に陥らないように注意し

なければなりません。一つは余りにも悪霊に注目し、何でもかんでもすぐに「悪霊だ！悪霊だ！」と騒ぐことです。そしてもう一方の極端、今日の多くの人が陥りやすい誤りは、サタンを無視することです。しかし聖書ははっきり語っています。なぜこの世はこのように罪や悪や不幸で満ちているのでしょうか。それはサタンの誘惑に人間が屈したからです。サタンは聖書によれば高慢になって墮落した天使で、彼は神に対抗し、神の計画をみなつぶそうとしてアダムとエバを罪へ誘い込みました。しかし神は創世記 3 章 15 節で原始福音と呼ばれる救いの約束を与えてくださいました。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」 以後の歴史は一言で言って、この神とサタンの宇宙的な戦いの歴史と言えます。神はサタンの支配下に入った人間を必ず取り戻し、ついにはサタンを滅ぼすと言っています。この約束の成就を巡って歴史は進んでいます。ですからペルシャの国の動きの背後にも、もちろん霊的な戦いが存在しています。そのペルシャを通して神の民を苦しめ、神の計画を頓挫させようとする悪霊の力と、そうならないように神のもとで仕え、神の民を守る正しい天使たちとがいるのです。

15 節にはダニエルがこれを聞きつつ、うつむいて何も言えない状態になっていたと記されています。するとまた、人の姿を取った者がダニエルの口に触れたことによってダニエルは話し出します。しかし力も失せてしまい、息も残っていないと語るのが精一杯。そこでまた人間のように見える者がダニエルに触れて力づけます。「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」 ダニエルが奮い立つと、彼は 20 節でこのようなことを言います。「私はこの後、ペルシャの君と戦うためにまた戻って行く。そして次にはギリシャの君がやって来る」と。ご存知のようにペルシャの次に来る国はギリシャです。そのギリシャにも「ギリシャの君」と呼ばれる霊的存在がついている。そういう先のことまでこの天的存在は把握しています。「しかし、真理の書に書かれていることをあなたに知らせよう」と彼は言います。この「真理の書」とは神のご計画が記された書のことで、具体的な中身は 11 章 2 節から記されます。そこではペルシャの後のギリシャ時代のこと、またさらにその後の時代のことが語られます。それを告げたら、この天的存在はペルシャの君、そしてギリシャの君との戦いに戻って行きます。今日は 11 章 1 節まで読んでいただきましたが、ダニエルに語りかけていた彼はメディア人ダリヨスの元年のことを思い起こしています。その時もこの彼とミカエルの働きがあったのです。地上の出来事の背後には、このような霊的存在の働きがあるということです。

この章を読んで私たちは驚いたでしょうか。これが本当なら、恐ろしい世界に私たちは住んでいることになるでしょうか。しかしダニエルに一人の人が現れてこれらのことを語ったのは、聞く者が慰めと励ましを得るためです。イスラエルはこの時、捕囚から解放されたとは言え、なお困難な状況に直面していました。しかしそんな中にある彼らは一人で戦っているのではないと今日の御言葉は教えています。彼らにはイスラエルを守りたもう天の使いたちがついています。その存在はダニエルが気を失い、倒れるほどの恐ろしいほどの存在です。そのような力強い存在を通して神が守り導いてくださっている。次の11章では真理の書に基づいて、この後、世界がどのように進むのかが示されます。神はそうようにこれから先のこともすべて詳細に渡って掌握しており、支配している。そして必ず救いへと至る計画を定めておられる。この神の絶対主権と天からの支えに信頼して、日々の戦いに励むように！ということでしょう。

今日の私たちも日々、様々な戦いや困難の中にあります。それは本質的には神とサタンの宇宙的な戦いの中に位置づけられることです。そして思うべきはこの戦いにおいて私は一人ではないということです。私を守り、支えていてくれる天的な存在がある。神はこのような存在なしでも私たちを守ることができますが、私たちの慰めとなるように多くの御使いを遣わして私たちを守っていると聖書で啓示してくださっています。私たちはこの守り手が自分の上にもいてくれることを感謝して日々の歩みをなすのです。

そして私たちはさらに強い確信を持つことができます。黙示録12章7～9節：「さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。」ここに神の民を守る第一の君ミカエルのサタンに対する決定的勝利が語られています。これはいつのことでしょうか。続く10～12節を見ると分かりますように、これはイエス・キリストを通してのことです。イエス様はルカ10章18節で「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。」と言われました。そしてその決定的勝負はイエス様の十字架と復活によってつけられました。サタンは全力を傾けてイエス様に挑み、十字架のみわざを妨害・阻止しようとしたましたが、イエス様は最後まで神のご計画の道を踏み進んで罪人を贖うみわざを全うされました。この結果、サタンの敗北は決定的となったのです。しかし12節後半に「地と海とは、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこ

に下ったからである。」とありますように、サタンは最後のあがきに出ていて、少しでも多くの者を滅びへ招こうとしています。ですから決して私たちは甘く見ることはできません。キリストの勝利により頼みつつ、なお最後の日までは戦いが続くのです。

改めてこの章から、地上の生活は霊的な世界との関わりの中にあることを覚えたいと思います。私たちの日々の歩みは「神のご計画がなるのか、それともサタンの計画がなるのか」というより大きな宇宙的な戦いに関わっています。私たちがこのことに無頓着で、地上的な思いで歩み、いつの間にかサタンの計画を推進する道具となってしまうことがありませんように。私たちが願うことは神の御心が実現することです。神のご計画がなり、御国が完成し、神にこそ栄光が帰されることです。そのためにもどう歩むべきか、上からの知恵と力を頂くことができますように。エペソ書6章12節：「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」 霊的な武器である御言葉に聞き入り、祈りをもって神とともに戦い、主が来られる日に、喜びをもって祝福の国へ迎え入れられる神の民の歩みへ導かれたいと思います。